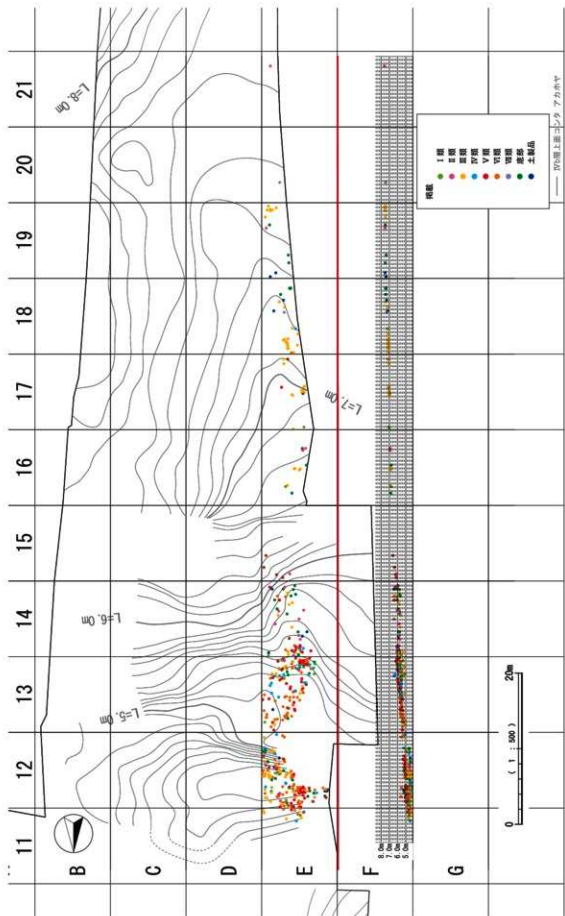
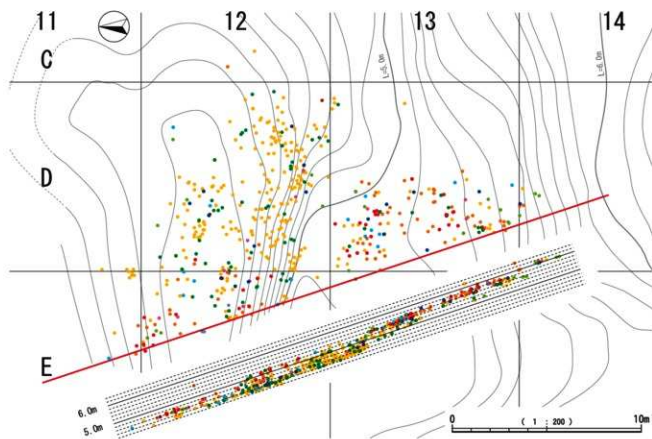
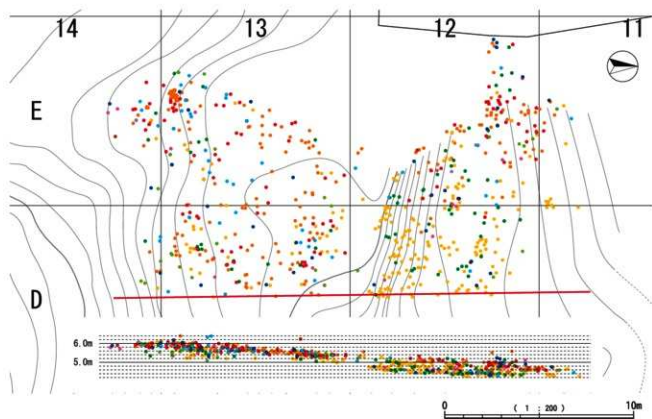


第3-62図 縄文時代後期遺構内出土土器一覽



第3-63図 縄文時代後期附土器断面分布図（1）



第3-64図 縄文時代後期土器垂直分布図(2)

第3-40表 縄文時代後期出土土器自然科学分析測定結果一覧表

掲載番号	試料番号	測定機関番号	^{14}C 年代	補正用 $\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	分類	型式	器種	部位
1060	25	PLD-42978	4235 ± 35	-24.86 ± 0.56	-26	4		松山式	深鉢	口~胴外
1068	20	PLD-42973	4185 ± 25	-23.96 ± 0.23	—	—		指宿式無文	深鉢	胴外
1082	34	PLD-43561	4010 ± 40	-28.74 ± 0.64	—	—		磨消縄文 (指宿併行か)	深鉢	口唇部
1239	KAMEN-17	TKA-23866	3923 ± 28	-26.1 ± 0.3	—	—		指宿式	深鉢	胴中外
—	28	PLD-42981	3840 ± 25	-25.76 ± 0.22	-26.4	12.3		指宿式	深鉢	口外
1049	19	PLD-42972	3815 ± 25	-26.44 ± 0.26	—	—		指宿式	深鉢	胴内
1344	29	PLD-42982	3795 ± 25	-25.87 ± 0.24	-26.3	8.38		指宿式?	深鉢	口外
1586	KAMEN-6	TKA-23862	3775 ± 34	-27.4 ± 0.3	—	—		市来式	深鉢	胴下外
1214	KAMEN-20	TKA-23924	3764 ± 23	-30.2 ± 0.4	-29.1	5.2		指宿式	深鉢	胴上内
—	33	PLD-43560	3755 ± 20	-25.93 ± 0.12	—	—		市来式	深鉢	胴内
1621	KAMEN-12b	TKA-23864	3720 ± 28	-24.0 ± 0.2	—	—		市来式	深鉢	胴上外
—	14	TKA-18534	3708 ± 26	-25.2 ± 0.4	-23.2	4.8				
1523	KAMEN-13c	TKA-23865	3703 ± 30	-24.3 ± 0.3	—	—		松山式	深鉢	胴中内
—	17	TKA-18541	3699 ± 26	-24.5 ± 0.4	-23.7	5.5				
1649	KAMEN-3a	TKA-23861	3682 ± 30	-29.5 ± 0.3	—	—		市来式	深鉢	胴中内
1595	KAMEN-2a	TKA-23921	3680 ± 23	-29.3 ± 0.3	—	—		市来式	深鉢	胴下内
—	16	TKA-18536	3645 ± 26	-31.2 ± 0.4	-27.2	4.7				
—	15	TKA-18535	3633 ± 25	-35.3 ± 0.4	-26.6	2.3				
1657	KAMEN-7	TKA-23863	3632 ± 29	-26.2 ± 0.2	—	—		市来式	深鉢	胴中外
—	31	PLD-42984	3620 ± 25	-28.39 ± 0.24	-26.4	11.7		市来式	深鉢	口外
—	30	PLD-42983	3600 ± 25	-25.44 ± 0.25	-23.4	5.58		市来式	深鉢	口外
—	12	TKA-18538	3587 ± 25	-28.9 ± 0.4	-25.1	7.6				
1649	KAMEN-3b	TKA-23922	3582 ± 23	-27.2 ± 0.5	-26.6	11.1		市来式	深鉢	胴上外
—	13	TKA-18537	3503 ± 25	-23.9 ± 0.4	-23.8	4.5				
1621	KAMEN-12a	TKA-23923	3497 ± 23	-28.1 ± 0.5	-24.8	7.3		市来式	深鉢	胴下内
1031	18	PLD-42971	3415 ± 40	-35.01 ± 0.72	—	—		指宿式	深鉢	口外
—	11	TKA-18539	2891 ± 23	-20.2 ± 0.4	-23.7	1.1				
—	10	TKA-18540	2585 ± 24	-22.2 ± 0.4	-23.6	-0.4				

(2) 分類

本遺跡から出土した遺物を分類毎に集成した図が、第3-65図である。薩摩半島南西部の縄文時代後期は初頭に南福寺式土器、出水式土器、岩崎上層式土器が出現し指宿式土器に変わり、松山式土器そして中葉になると市来式土器になるとされている。本遺跡からは縄文時代後期の特に前半~中葉の指宿式土器・松山式土器・市来式土器が大量に出土しており、これらを包含層出土遺物ではⅢ類~Ⅵ類に分類を行った。指宿式土器をⅢ類に松山式土器をⅣ類、市来式土器をⅤ~Ⅵ類に分類を行った。さらにそれらの内28点の自然科学分析(放射性炭素年代測定及び炭素・窒素同位体比分析、第8章第2~4節参照)を行い、一部は中央大学文学部教授小林謙一氏が分

析を行っている(第8章第16節)。それらを一覽にまとめたのが第3-40表である。

遺構出土の土器

遺物集中からはⅢ類・Ⅳ類の土器が、出土した。包含層から出土した土器の分類に照らし合わせると遺物集中1からⅣ類、遺物集中2からはⅢa類、遺物集中3からはⅢd類、遺物集中5からはⅢb類と「壺」状の土器、遺物集中6からⅢb類、遺物集中7からⅢb類とⅢd類及び台付皿、遺物集中8からⅢd類及びⅣ類、遺物集中9からⅢb類とⅢd類、遺物集中10からⅢb類が出土している。なお、遺物集中4は、円盤形土製品の集中箇所である。さらに、土坑31号からはⅤ類が、出土している。以上のことから遺物集中の土器は、Ⅲ類に集中している

ことがわかる。特にⅢb-2類(靴形文)は5か所の土器集中から、Ⅲd類(無文)は4か所の土器集中から、Ⅲb-3類(山形文)とⅢb-4類(横「W」字文)はそれぞれ1か所の土器集中から確認された。このように遺物集中から出土する土器は主にⅢ類ではあるが、細かく見ると偏りがある。具体的には、Ⅲb-1・5・6類は出土していない。つまり、Ⅲ類は遺物集中の時期のものとして以外のグループで分類することができる可能性がある。

次に、包含層出土のⅢb類は、施される文様に着目して細分した。ここでは文様の割り付けや規格性という観点からⅢb類の特徴を述べる。大きくは文様の割り付けを行うものゝ割り付けを行わないものに分けることができる。割り付けを行うものは1単位の文様の大きさが統一されるが、割り付けを行わないものは一周した施文が最後でそれまで施してきた規格性のある文様の大きさと違いが出てくるという特徴をもつ。また、割り付けを行わないものでも1単位の文様に規格性がなくなり、文様の簡素化が見られるものもある。

以上の観点から一覧にまとめたものが、第3-62図である。これを見ると文様の割り付けを行うもの(Ⅲa-1類・Ⅲb-1類)と行わないもの(Ⅲb-2~7類)が併存することはない。文様の割り付けを行わないが一定の規格性のある文様をもつものと文様の割り付けを行わず文様も簡素化するものは併存するとわかる。

I類土器

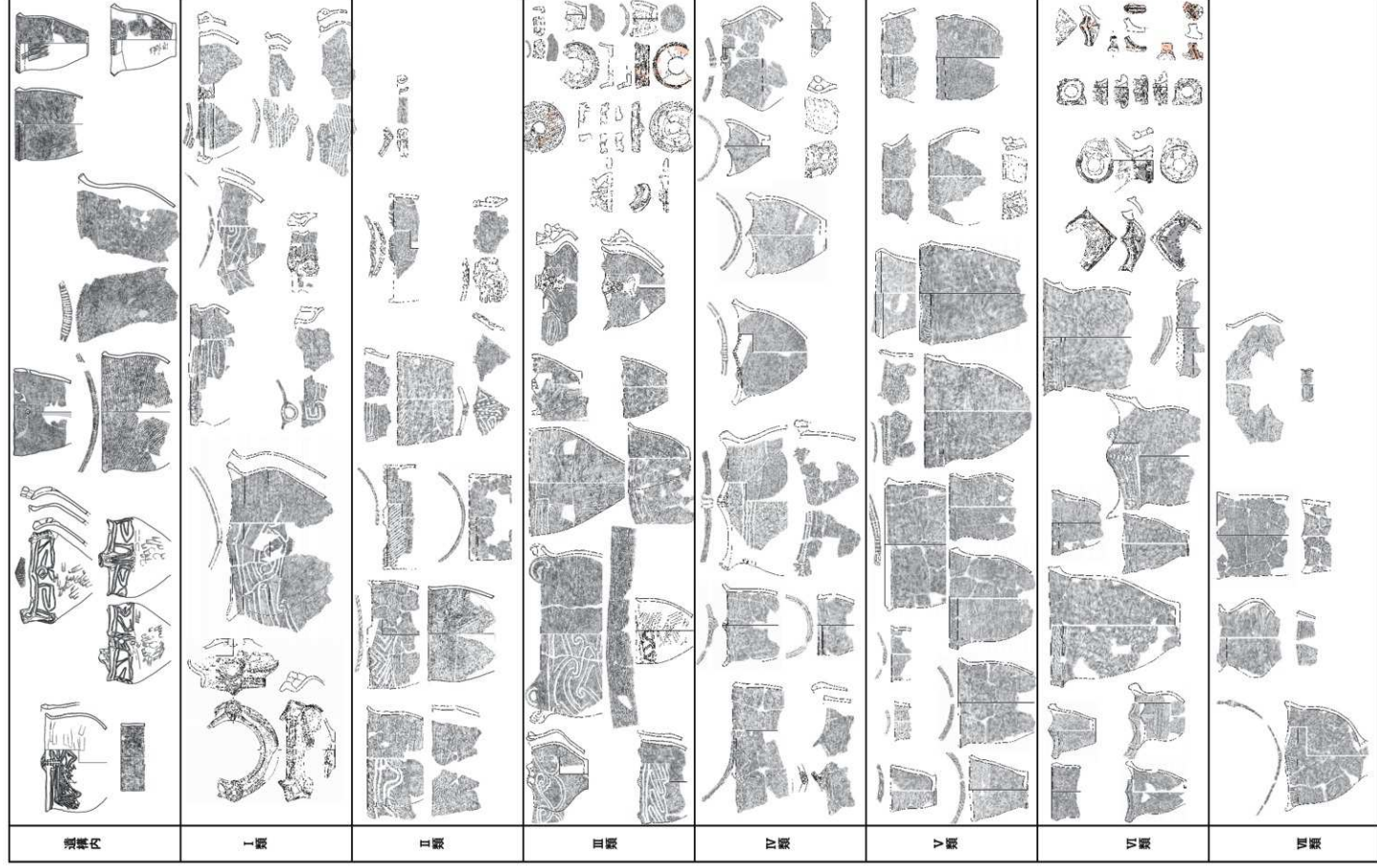
I類は磨消縄文で、貝殻などで縄文を模した擬縄文もここに含む。I類は文様構成によって5つに分類(Ia~Ie類)でき、上記に当てはまらなかったものをIf類とした。Ia類は、3本1組の沈線で文様を構成する福田K2式併行~福田K2式の1段階後の時期である。Ib類は2本1組の沈線で文様を構成し、福田K2式の2段階後の時期である。Ic類は肥厚した口縁部に沈線と縄文で文様を構成するもので、福田K2式の2段階後~小池原下層期の時期である。Id類は口縁部や口唇部、胴部に渦巻文や渦巻状の文様を施すもので、肥厚した口縁部に半月状や「C」字状の沈線を向かい合うように施し、胴部に渦巻き状の「e」字状の沈線を施す1115は小池原下層期に比定され、口唇部に「S」字状に粘土紐を貼付け、口縁部~胴部に横に広い渦巻き文を施す1120は小池原上層期に比定される。Ie類は肥厚した口唇部が幅広くそこに沈線や刺突を施し、波頂部の口縁部~胴部に把手や渦巻き文を施し、口縁部~胴部に2本~3本の沈線と縄文を施す折崎式である。If類は上記に該当しない土器で、器形や文様等からおおよそIb類の時期に併存すると考えられる。1138・1139は3本1組の沈線と擬縄文を施しており、Ia類と同時期の可能性が高い。

I・II・Ⅲ類土器

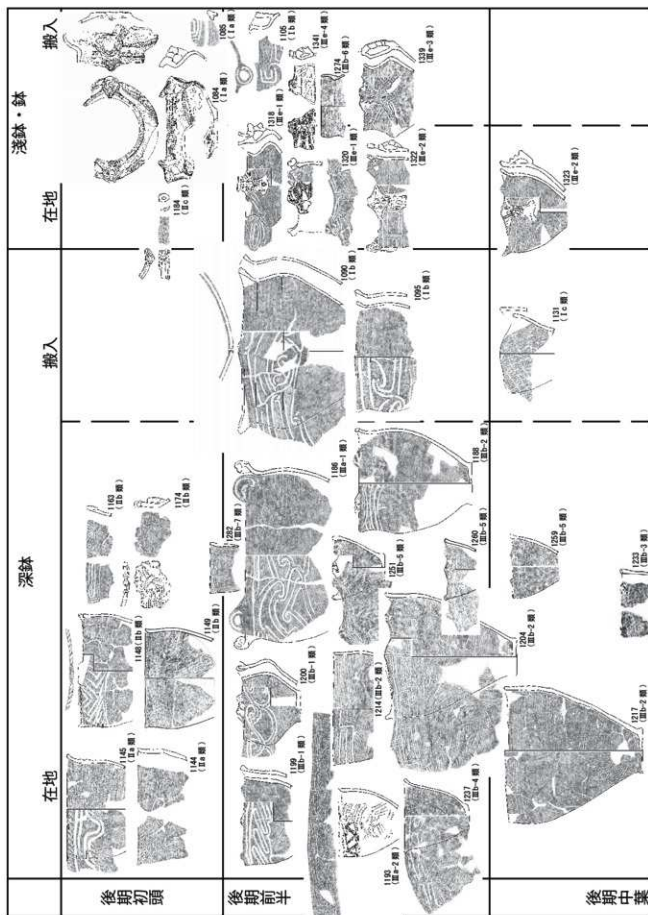
I類は磨消縄文で、その文様構成で6つに分類した。II類は凹線文系土器で宮ノ迫式土器・岩崎上層式土器・南福寺式土器・出水式土器を含み、大きく2類に分類した。口縁部に刺突や短沈線を巡らせその下に凹線による主文様を施すものIIa類(宮ノ迫式土器の特徴をもつもの)と口縁部に沈線や突帯、肥厚部による区画をもつ文様帯をもち、そこに凹線文を施すIIb類(出水式土器の特徴をもつもの)に分けた。ここではI類とII類の関係性についてIa類の1084を例にして考える。1084は口縁部が肥厚し、そこに横位の刺突を2段、その左右に2本の沈線を配し、胴部には3条1組の沈線文を施している。同じく胴部に3条1組で文様を構成する福田K2式(新相)の特徴を有することからIa類に分類した。1084の口縁部形態及び文様は、IIb類の1165と類似している。つまり、1084は口縁部にIIb類の特徴である文様をもち、胴部にはIa類の特徴をもつ文様を施していることからIa類とIIb類の折衷型の土器であるといえる。このことから、Ia類とIIb類は併行関係にあると考えられる。

Ⅲ類は文様構成が複数種類のもの(Ⅲa類)と単一種類のもの(Ⅲb類)の大きく2種類に分け、さらに文様帯の幅が胴部まで広がるもの(a-1類、b-1類)と口縁部のみ狭いもの(a-2類、b-2~7類)によっても細分することができた。ここではⅢ類の中でも口縁部から胴部上位まで文様が施文された複数種類の文様を施すⅢa-1類と磨消縄文で2条1組の沈線と縄文で文様を構成するIb類の比較を行う。1186(Ⅲa-1類)の文様は胴部まで及び、2条の平行沈線で曲線や直線による文様を、沈線の端部は鉤手状の渦巻文を施す。1086(Ib類)も口縁部から胴部下位近くまで文様を施す。文様は2条1組の沈線で曲線や直線による文様を施し、端部は鉤手状の入組文で構成される。2条1組の沈線端部が1186に見られる渦巻文とはならないが、全体的な文様構成は類似している。同じように1090(Ib類)も胴部上位までの文様帯をもち、文様構成も1186と類似する。このように、Ⅲa-1類とIb類は関係性をもつと考えられる。

遺物集中から出土したⅢb類の文様割り付けの特徴については前述のとおりであるが、ここでは包含層出土のⅢa類とⅢb類について文様割り付けの観点で比較検討を行う。Ⅲa類は複数の文様を沈線で施すものである。Ⅲb類は、口縁部に沈線で構成される単一の文様を施すものである。Ⅲa-1類の1186・1187は突起をもち、突起が基点となり規格性のある文様がある。Ⅲa-2類の1193は、平行線で口唇部に2個の刻みを施して割り付けを行っているようにも見える。しかし、個々の文様の規格性は崩れ、口唇部の刻みは文様割り付けの基点としての役割を果たしていない。つまり、Ⅲa-1類とⅢa-2



第3-45図 縄文時代後期土器の分類一覧



第3-66図 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の併行関係

類の狭間にある土器といえる。Ⅲb-5類の1251は波頂部を4か所もつ。Ⅲa-1類では、波頂部や突起が文様割付けの基点となって規格的なある文様が施されていた。しかし、1251は1か所の波頂部では沈線が跳ね上がるように施されるが、もう1か所では折れ曲がるだけで規格的なある文様とはなっていない。つまり平口縁にあっては口唇部の刻みや波頂部や突起を基点として規格的なある文様を割付けるといった概念は薄らいでいるという現れと考える。さらに、Ⅲb-2類の1217は平口縁で、その口唇部には文様割付けの基点となる刻みはない。口縁部に施される文様の横幅は、まちまちである。Ⅲb-5類の1260は、突起を4か所もつ。しかし、突起と関係なく規格的なない文様が展開される。この頃になると、Ⅰ類のように波頂部など基点とし、規格的に文様割付けを行う意義を見いだせなくなっていると考えられる。

Ⅱ類とⅢ類土器

さらに口縁部から胴部上位まで単一の文様が施されるⅢb-1類と口縁部に刺突や短沈線を巡らせ、その下に凹線による主文様を施すⅡa類との関係性を探る。1199(Ⅲb-1類)は口唇部直下に2条の太目の沈線を横位に、その下に大波文を沈線で施す。1145(Ⅱa類)は口唇部直下に2条の凹線を横位に施し、その下に波形の曲線文を描く。両者の文様構成は、極めて類似する。Ⅲb-1類は2点図化した。もう1点の1200も大振りの2条1組の曲線文が胴部まで描かれる。これらことからⅢb-1類とⅡa類は関係性があると考えられる。また、Ⅲb-7類の1282は口縁部が肥厚しそこに2条の沈線を施している。1282のように口縁部が肥厚するものは他のⅢ類ではほぼ見られないため、Ⅱb類の1163などと関係性がある可能性が考えられる。

Ⅲ類・Ⅳ類土器について

Ⅳa類は、口唇部及び口縁部に文様帯をもつものである。特に1375は、Ⅳ類の特徴である口唇部に3条の縦短沈線と2条の横短沈線を施す。そして、縦短沈線を起点に口縁に山形の2条の歯文を施す。また、Ⅲb-3類の1233は口唇部に斜めの平坦面をもち、そこに山形の沈線を施し、さらに口縁部に2条の歯文を施している。これら2つは口縁部の文様構成が近似しているが、口唇部の文様構成及び口縁部から口唇部の器形が異なる(第

3-67図)。これら2点のようにⅢ類(指宿式土器)からⅣ類(松山式土器)への移行期と考えられる遺物が出土したが、少数のため詳細は不明である。今後の資料数の増加を待たたい。

Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類土器

Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類は本道跡出土土器群のうち、いわゆる松山式土器及び市来式土器に比定される土器群を文様構成によって再分類したものである。それぞれを文様構成及び器形によって並べ、それと併行すると考えられるⅠ類土器(磨消縄文系)を並列したものが第3-68図である。

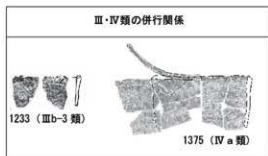
Ⅳ類土器は「縦3条短沈線+横2条沈線」で文様を構成するものであり、それらは口唇部が肥厚し、そこに文様帯をもつ。縦3条短沈線が刺突に変化し、多条になってくると口唇部の肥厚部が下に下がり始め、口縁部の断面が三角形状になってくる。この頃になるとⅣ類とⅥ類の境目に位置するものになる。

Ⅴ類土器は文様帯が「連続刺突文」で構成されるものであり、文様帯は口唇部から口縁部まで広がる。口唇部に文様帯をもつものはⅣ類土器の器形と近似し、口縁部に文様帯をもつものはⅥ類土器の器形と近似する。

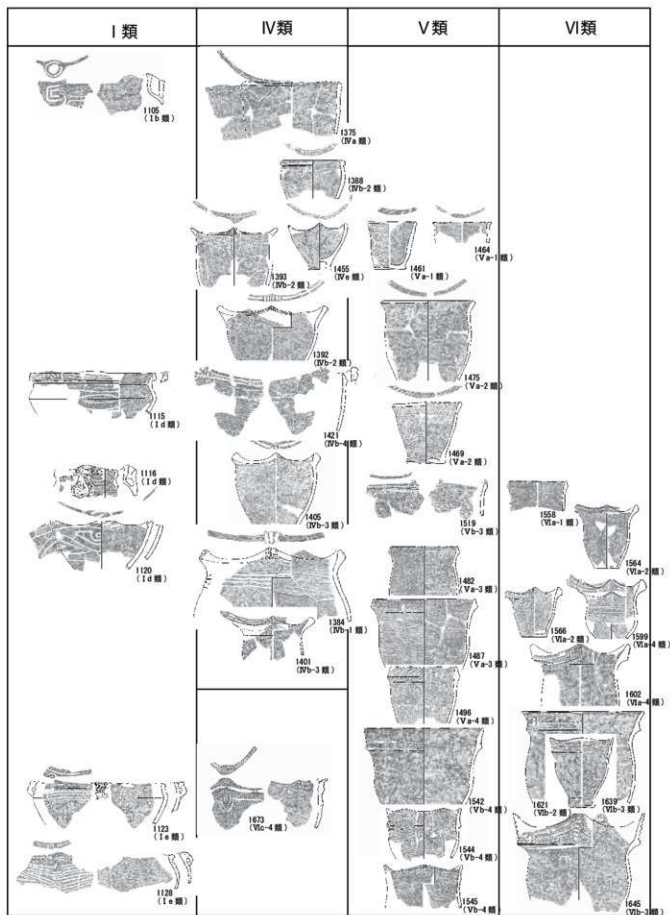
Ⅵ類土器は文様帯の上下を刺突で区画し、その内側に沈線や刺突等の文様を施すものである。これらの文様は口縁部が肥厚する断面三角形状のものから口縁部中央が凹み口縁部下位が肥厚する断面「く」の字状の口縁部文様帯に施される。Ⅵ類土器の中で口縁部上下を刺突で区画し、その内部にあまり多くの文様をもたないものは口縁部断面形態が正三角形に近く、Ⅳ類と近似した器形をもつものがみられる。しかし、これらは全体として口縁部断面形状が直角三角形から「く」の字状となり、Ⅳ類土器の器形に後出するものと考えられる。

Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類土器を器形を通して並べたところ、Ⅳ類は文様帯の肥厚部が口唇部から口縁部に移動し、口縁部の肥厚部が大きく断面三角形状を呈してくると文様のパリエーションが増え、波頂部の縦区画の範囲が広がってくる。Ⅴ類は文様帯が口唇部から口縁部まで移動し、さらに口縁部に移動すると断面三角形から断面「く」の字状と口縁部形態が多様である。しかし、口唇部に文様帯をもつものはごく一部に限られ、そのほとんどが口縁部にある。Ⅵ類は文様帯が口縁部にのみあり、口縁部も断面三角形から断面「く」の字状まで広がり、さらに断面「く」の字状になると口縁部幅がかなり広がることで文様のパリエーションが豊富になる。また、Ⅳ類・Ⅴ類ではあまり見られなかった波頂部の頂部や内面に刺突等の文様を施すものが多くなることわかった。

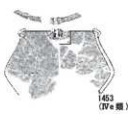

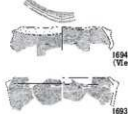







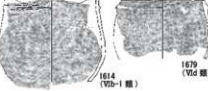
Ⅰ類とⅣ・Ⅴ・Ⅵ類を比較したところ、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵの各類において磨消縄文系の器形や文様形態を模倣し、折衷したものが1点ずつみられた。Ⅳ類の1421は波状口縁で波頂部口唇部から口縁部に数の異なる刻みをもつ。こ



第3-67図 Ⅲ類とⅣ類の類似土器



第3-68図 I類とIV・V・VI類の併行関係

		IV類	V類	VI類
鉢	内湾			
	外反			
	その他			
深鉢				 

第3-69図 IV・V・VI類の深鉢及び鉢

れがI類の1115(小池原下層式土器)の波頂部の文様構成と近似している。V類の1519は平口縁で突起をもち、そこに刺離しているが「S」字状のような突起を付けている。これはI類の1120(小池原上層式)の波頂部口縁の「S」字状突起を模倣したのではないかと考える。VI類では、波状口縁の1673が波頂部の口唇部に平坦面をもち、そこに刺突を施している。これはI類の1123・1124などにみられる鐘崎式土器の鉢の口唇部に平坦面をもち、そこに刻みを施す文様を模倣したものではないかと考える。

また、IV～VI類では深鉢の小型化した鉢(IV類:1454・1455など)ではなく、口縁部が内湾する器形をもつ鉢形の土器が一定量出土することがわかった(第3-69図)。

鉢形の土器は口縁部が内湾するものだけではなく、1456(IV類)・1553(V類)・1696や1697(VI類)などのように口縁部が外反し、胴部が強く張る土器もみられる。また、V・VI類では、1527・1673・1614・1679などのように深鉢の中にも口縁部がゆるく内湾する土器もみられ、深鉢～鉢の間に近い器形の土器もみられる。VI類では、IV・V類に比べ、深鉢～鉢の間の器形をもつ土器や鉢形の土器などの出土量が多く、1673や1694のように鐘崎式の鉢形土器の口唇部文様に類似する土器も含まれていることがわかった。これらは今後同時期の器種構成を考える上での資料となると考える。

小結

縄文時代後期初頭～中葉の土器群I類～VI類を深鉢、

鉢、その他器種をまとめて縦方向に配置すると第3-70図のようになる。これを系統別に見ていくとⅠ類（磨消縄文系）と文様構成が同様の様相を示すのはⅢ類の頃までで、Ⅳ類以降になると緑帯文土器の影響から文様ではなく器形に磨消縄文の影響が見受けられるようになる。

しかし、Ⅳ類の142ⅠやⅤ類の1519、Ⅵ類の1673・1694の様に一部磨消縄文の影響を受けた文様を施すものも見受けられる。また、第3-70図は各時期の薩摩半島西部における当該時期の土器型式を各時期の後ろに括弧書きで記載した。

また、本遺跡の同時期の器種構成をみると、後期初期（出水式土器ほか）では深鉢を主体に鉢・浅鉢が少量含まれ、後期前半（指宿式土器）になると深鉢（大～小）を主体に鉢が一定量、台付皿・器台・小型土器などがごく少量含まれる。後期前半～中葉（松山式土器）では深鉢（大～小）を主体に鉢・台付皿が少量含まれ、後期中葉（市来式土器）になると深鉢（大～小）を主体に鉢・台付皿が一定量、注口土器・舟形土器などの特殊土器がごく少量含まれている。深鉢は後期前半に口径・器高ともにサイズが最大化し、小型の深鉢（口径20cm以下）は各時期に一定数みられる。このように後期前半～中葉は器種構成が深鉢・鉢・台付皿をセットに各時期によってその他の土器（器台、小型土器、注口土器、舟形土器）が含まれ、器種のヴァリエーションに富んでいることがわかる。

本遺跡出土のⅠ類（磨消縄文系）と在地の土器（Ⅱ～Ⅵ類）の併行関係を一部当てはめることができた。しかし、これらは器形や文様構成などの型式による併行関係だけでなく、遺構内などの一括遺物によるものではないため、今後そのような資料が増加することで、さらに詳細に判明すると思われる。

3 縄文時代後期の石器

(1) 打製石鏃について

縄文時代後期と考えられる打製石鏃は、406点出土しており、そのうち166点（約41%）を報告している。報告した石鏃から出土傾向及び組成の傾向を考察したい。

なお、石鏃の分類基準は事実記載でも述べているが、下記の通りである。

- Ⅰ類 基部が平坦で挟りのない平基式無茎鏃
 - a 正三角形形状を呈するもの
 - b 二等辺三角形形状を呈するもの
- Ⅱ類 正三角形形状を呈し、挟りがあるもの
- Ⅲ類 二等辺三角形形状を呈し、挟りがあるもの
- Ⅳ類 先端部が錐状を呈するもの
- Ⅴ類 欠損のため、全体形状が不明なもの
- Ⅵ類 未製品

中津野遺跡の打製石鏃の多くは、C・D-25・26区に集中している（第2-131図参照）。剥片も比較的集中している。このことから、同地点は石器製作跡の可能性がある。

打製石鏃の分類ごとの種類は、基部に柄挟りのある凹基式の石鏃（Ⅱ・Ⅲ類）が全体の67%を占め、平基式は約20%である。

石材別ではOB4（腰岳系）の黒曜石が166点中79点で約48%、次いで安山岩が166点中64点で約39%を占める。

分類ごとの石材傾向は、Ⅰ類・Ⅱ類ではOB4が約52～55%で、OB4が占める割合が高い傾向が窺える。Ⅲ類では、逆にAN（安山岩）が約53%を占める。さらにⅠ類だけを細分してみるとⅠa類（正三角形形状）OB4（15点）AN（5点）・他（1点）、Ⅰb類（二等辺三角形）OB4（3点）・AN（5点）・他（4点）となり、正三角形形状の打製石鏃はOB4を石材とし、二等辺三角形形状は安山岩を石材とする傾向があることが分かる。これらは、石材選択による打製石鏃の形状の差なのか、単なる偶然なのかは不明である。搬入された黒曜石はほとんどが腰岳系と考えられ、大隅半島で多い飯島などの黒曜石はなかったことが挙げられる。これは従来からの傾向であるが、中津野遺跡が薩摩半島の西部に位置することが大きな要因であると考えられる。

第3-41表 打製石鏃石材組成表（単位：個数）

器種\石材	OB1	OB2	OB3	OB4	OB5	OB6	OB7	OB8	AN	CH	HF	SH	SA	CC	CL	GR系	TU	他	合計
石鏃	4	0	0	79	6	0	0	0	64	0	6	0	0	6	0	0	1	0	166
Ⅰ類	0	0	0	18	1	0	0	0	10	0	1	0	0	3	0	0	0	0	33
Ⅱ類	3	0	0	34	0	0	0	0	25	0	0	0	0	2	0	0	1	0	65
Ⅲ類	1	0	0	14	4	0	0	0	25	0	3	0	0	0	0	0	0	0	47
Ⅳ類	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
Ⅴ類	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
Ⅵ類	0	0	0	8	1	0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	13

(2) 磨製石斧について

縄文時代後期と考えられる磨製石斧はD・E-12・13区(第2-133図参照)を中心に、178点出土しており、その内52点(約29%)を図化している。報告した磨製石斧からの組成や法量の傾向から考察したい。

なお、磨製石斧の分類は、本文記載でも述べているが、下記の通りである。

I類 断面が楕円形で、頭部の細い乳房状のもので、いわゆる乳房状磨製石斧

II類 断面が隅丸長方形で、両側面及び頭部が研磨されたもので、いわゆる定角式磨製石斧

III類 片刃で研磨成形を施すもので、いわゆる石ノミ形石斧

IV類 その他、I～III類以外のもの

I類は、縄文時代でも最も一般的な磨製石斧である。斧身が厚く直線的であり、刃部は蛤を合わせたような両刃で、「斧」として使用されたと考えられる一群である。

I類の平均法量は最大幅・最大厚・重量とも、最大値を示しており、肉厚で重量の必要とされる「斧」としての機能を示すものと考えられる。

II類は比較的大型のものから、片刃で厚さが薄いものも存在する。そのため、伐採から木材加工工具としての利用が推定され、「斧」から「手斧」・「ノミ」まで幅広い用途が想定される。その中でも、本遺跡では比較的肉厚のものも多く存在するため、I類との機能差などを今後検討する必要がある。

III類は石ノミ形石斧で、平均法量が最大幅・最大厚・重量も最小値を示しており、より細かい加工を行ったものと考えられる。

IV類としたものは最大厚・重量がI・II類よりも小さく、比較的小型で薄手であり、片刃になるものも多い。また、微細な剥離が見られるものもあり、III類と同じく細かい加工を担う製品が多いと考えられる。

IV類の内2281・2282・2283・2284・2285は、未製品である。また、磨製石斧の石器組成は主に砂岩や熱変性を受けたと考えられるホルンフェルスで、さらに花崗岩や閃緑岩と考えられるものも含むと52点中40点で、約77%を占める。中津野遺跡の東側に位置する金峰山系は、主に白重系の砂岩・泥岩から構成される四万十層群である。各所で第三紀花崗岩が貫入し、金峰山西麓に露出しているとされているものも、磨石・敲石の中には石器製作に用いられたと推定されるものがあり、2364や2379は石器製作に用いられたと考えられる敲痕と剥離が見られる。これらのことから、磨製石斧の生産地の可能性も考えられる。

第3-42表 磨製石斧分類ごとの平均法量

磨製石斧 法量			
分類\法量	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
I類	5.90	3.36	348.62
II類	5.43	2.79	341.54
III類	2.21	1.33	43.60
IV類	5.18	2.09	176.83

第3-43表 磨製石斧石材組成表

器種\石材	AN	CH	HF	SH	SA	CC	CL	GR	SR	TU	他	合計
磨製石斧	1	0	18	5	18	3	3	4	0	0	0	52
I類	1	0	4	1	6	0	0	1	0	0	0	13
II類	0	0	3	1	5	2	0	2	0	0	0	13
III類	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	0	4
IV類	0	0	10	3	6	1	1	1	0	0	0	22

(3) 打製石斧について

縄文時代後期に属すると考えられる打製石斧は162点出土しており、そのうち53点(約33%)を図化している(第2-133図参照)。ここでは、報告した打製石斧の組成や法量の傾向から若干の考察を行いたい。分類ごとの平均法量を第3-44表に、石材組成表を第3-45表に示した。

なお、打製石斧の分類は、事実記載でも述べているが、下記の通りである。

打製石斧分類基準

I類 ヘラ形(両耳型)で、刃部の両側部が摩耗し、基部に挟りがあり、淡れた光沢があるもの

II類 ラケット形(有肩石斧)で、刃部に刃こぼれや摩耗が生じ、基部が細く両側部に摩滅による光沢や淡れが生じているもの

III類 その他、I・II類以外のもの

打製石斧は一般的に土掘り具として認識されているが、形態や使用痕の観点から採掘具の可能性を指摘される。中津野遺跡でI類としたものはヘラ形で九州南部の縄文時代晩期特有の器種で、ヘラ・コテ的な使用を指摘されている。その使用目的は、軟質土壌の掘削(掘り起こし)や湿地性植物の地下茎植物採集・イモ類栽培など除草を想定している。ただし、身の厚いものは石鋸として使用されたとしている(板倉2009・2015)。平均法量値は最大幅・最大厚・重量ともI類からIV類の中でも最小値を示している。形状では全体的に先細りするものが多く、使用痕については刃部に対して横方向の擦痕が見られるものがある。仮に土掘り具と推定すると縦方向の

擦痕が見られ、刃部の使用形態は先細りするのではなく均等に潰れるものと推定される。また、平均法量からも各類の最小値を示し、土掘り具としては耐久性に劣るものと考えられる。このことから、単なる石製の土掘り具ではなく、板倉氏が指摘しているヘラ・コテの使用方法に適していると考えられる。

Ⅱ類は広刃型(有肩型)打製石斧とされ、幅広い素材と入念な基部成形が必要であり、より限定された用途が想定されている。刃縁を使用した植物利用の万能的なオノ・ナタ的な使用を指摘している(板倉2009・2015)。

本遺跡のⅡ類打製石斧は幅広く、Ⅰ類よりも厚み・重量も大きいため、指摘されるような用途の可能性もあると考えられる。

Ⅲ類については破片資料やⅠ・Ⅱ類のどちらとも分類できないものであり、敲打具への転用品も見られる。

石材組成はホルンフェルス製が多く、54点中39点(72%)である。Ⅱ類については、5点全てがホルンフェルス製である。

Ⅰ類のヘラ形は、九州南部の縄文時代晩期特有の器種の指摘もある(乙益1985)。本遺跡の主体は縄文時代後期前半～中頃の指宿式土器から市来式土器であり、時期差がある。九州南部の生業からの検討や技術的な系譜についての検討が今後必要であろう。

第3-44表 打製石斧分類ごとの平均法量

分類\法量	打製石斧 法量			重量 (g)
	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)		
Ⅰ類	6.21	1.68		134.48
Ⅱ類	8.01	1.83		173.28
Ⅲ類	6.30	2.07		155.32

第3-45表 打製石斧石材組成表

器種\石材	AN	CH	HF	SH	SA	CC	CL	GR系	TU	他	合計
打製石斧	4	0	39	4	2	0	5	0	0	0	54
Ⅰ類	2	0	24	2	2	0	5	0	0	0	35
Ⅱ類	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5
Ⅲ類	2	0	10	2	0	0	0	0	0	0	14

(4) 軽石製品について

縄文時代後期に属すると考えられる軽石製品は209点出土しており、そのうち103点(約49%)を報告している。

ここでは、本報告の分類と出土地点、Ⅰa類とした岩偶に類する軽石製品について考察したい。

なお、軽石製品の分類基準は、事実記載でも述べているが、下記の通りである。

軽石製品分類基準

- Ⅰ類 特殊な軽石製品(岩偶・獣形・除石・陽石・舟形)
 - a 岩偶に類するもの
 - b 除石・陽石に類するもの
 - c 舟形に類するもの
- Ⅱ類 特殊な加工を施すもの
 - a 穿孔や線刻を施すもの
 - b 穿孔が複数なもの
 - c その他の特殊な形状
- Ⅲ類 1つの穿孔のあるもの
 - a 楕円形・長方形で穿孔のあるもの
 - b 円形で穿孔のあるもの
 - c 未穿孔のもの
- Ⅳ類 楕円形・円形・球体に形状に整えているもの
- Ⅴ類 線状又は擦痕状による凹みがあるもの
- Ⅵ類 何らかの加工痕のあるもの

軽石製品全体の出土状況は、D・E-12・13区に集中していることが分かる(第2-134図参照)。掲載した軽石製品のうち、D・E-12・13区から出土した軽石製品は、103点中81点で約79%を占めている。この地点の同層から指宿式土器から市来式土器にかけての土器が多量に出土している。このことから、主に縄文時代後期の軽石製品と考えられる。

分類別の出土地点については第3-46表に示した。これを見ると特殊な加工を施すⅠ・Ⅱ類はD・E-12・13区に集中しており、低地とされる15～21区では出土がない。逆に、Ⅲ類・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類は15～21区でも出土が確認されており、出土状況の傾向が少し違うことが分かる。他の石器類の出土状況も調査地点に広く出土しており(第2-131～134図参照)、軽石製品Ⅰ・Ⅱ類の出土状況が特異な状況を示していることが分かる。発掘調査では埋納・埋設などの状況を示している出土は報告されていないが、この出土状況が1つの形を目的とし祭祀などに用いた非実用の軽石製品(Ⅰ・Ⅱ類)を示している可能性がある。

次に本稿のⅠa類(岩偶に類するもの)について、考察したい。岩偶については、寒川2002が詳しいので、その分類に基づいて、検討する。

寒Ⅰ類 頭部は丸く作り出され、頭部と胴部は巡る沈線によって区分される。腕部表現は見られない。胴部が作り出されているものもある。

寒Ⅱ類 頭部と胴部は沈線で区分され、腕部は「X」状の沈線、脚部は主に沈線、または切り込みにより表現される。脚部表現のないものもある。

- a 全体を楕円板状、もしくは板状に加工したものの棒状、または棒状にちかみの
- b

寒Ⅲ類 頭部と胴部は沈線で区分され、腕部は八字状線

第3-46表 軽石製品出土地点（掲載遺物のみ）

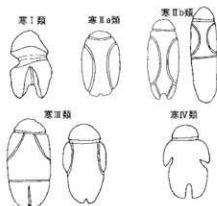
分類	グリット	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
掲載全て	C	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1
	D	1	34	14	3	1	1	0	0	1	5	1
	E	5	22	11	1	2	4	1	0	0	0	0
I a	C											
	D		5	2								
I b	C											
	D		1	1								
I c	C											
	D		1									
II a	C											
	D		2	1								
II b	C											
	D		1	4								
II c	C											
	D		1	1								
III a	C											
	D		7	2	1						1	
III b	C											
	D		4	2	1							
III c	C											
	D		3	1		1				1		
IV	C											1
	D		1	1							3	1
V	C											1
	D		1	1								1
VI	C											1
	D		2	1	1							

または胴部に接して作り出され、脚部は切り込みまたは突起により表現される。腰部に沈線が見られるものもある。

寒Ⅳ類 くびれにより肩を作り出し、沈線により頭部と胴部を区分し、腕部は胴部より分離する形で作り出される。最もひとつがたに近い形態を呈する。

寒Ⅴ類 その他

※本稿分類と区別するため、分類頭に「寒」を付して表記した。



第3-71図 岩偶各類の形態模式図
(寒川2002から引用・一部改変)

寒川氏はこの分類から、南九州の軽石製品岩偶は寒Ⅰ類→寒Ⅱ類→寒Ⅲ類→寒Ⅳ類と、大まかに具象化の方向を巡ると指摘し、その初現は市来式土器の時期としている。本遺跡のⅠa類を当てはめると、穿孔の有無・形状が一定しない等の疑問点はあるが、頭部と胴部は巡る沈線によって区分されているように見えることから、寒Ⅰ類に該当するものと考えられる。特に2401は草野貝塚出土の軽石加工品に近い形状であり、2402・2403は横線の線刻や線条痕で頭部と胴部を意識させるものである。

始良市木佐木原遺跡は宮之迫式土器を中心とする縄文時代中期後半～後期前半の遺跡であり、指宿市土器の時期には終焉を向かえると考えられる遺跡である。そこでは軽石製品の2000点前後出土しているとされるが、岩偶に類するものは報告されていない。このことから市来式土器の時期から軽石製岩偶が製作されることを示している。搬入系の土器である磨滑縄文土器とも重なることから、他地域の岩偶や土偶の影響を大きく受けているとも考えられる。

Ⅲa類は小型の製品が多く、穿孔を施し垂飾品と利用した軽石製垂飾品。Ⅲb類は円形で比較的大きな製品が多く、垂飾品よりは実用品の可能性が高い。Ⅳ・Ⅴ類は形状や擦痕・線条痕などから、軽石を利用して何らかの対象物を擦るなどの加工工具とした軽石製加工工具の可能性が高い。

本遺跡出土の軽石製品のみから検討をしてきたが、本県同時期の軽石製品の集成を行うことにより、今後その使用方法を含めて分類・編年を進めていく必要があると考える。

(5) その他の石器

本節で取り上げた石器以外に石鏃、尖頭器、異形石器、石匙、スクレイパー、使用痕及び加工痕のある剥片、石核、擦切石器、磨石・敲石、礫器、石皿・台石が出土した。ここでは個々に記述はしないが、それぞれの石器の石材組成を第3-47表にまとめた。

第3-47表 その他の石器の石材組成表

器種\石材	OB1	OB2	OB3	OB4	OB5	OB6	OB7	OB8	AN	CH	HF	SH	SA	CC	CL	GR系	TU	他	合計
石鏃	0	0	0	3	0	0	0	0	8	0	2	0	0	1	0	0	0	0	14
尖頭器	1	0	0	5	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
異形石器	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
石匙	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3
スクレイパー	0	0	0	1	0	0	0	0	4	0	9	0	0	0	0	0	0	0	14
使用痕跡片 加工痕のある剥片	0	0	0	6	0	0	0	0	1	0	2	2	5	0	0	0	0	0	16
石核	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	2	0	0	0	0	6
擦切石器	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	7	0	0	0	1	0	9
磨石・敲石	0	0	0	0	0	0	0	0	16	0	0	0	15	4	0	1	0	0	36
礫器	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	1	2	0	1	0	0	0	7
石皿・台石	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	0	0	0	4	0	10

一引用・参考文献一

板倉有太 2009「九州南部縄文時代後・晩期打製石斧類の器種分類」南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会編「南の縄文・地域文化論考上巻」

板倉有太 2015「石器から見た九州晩期農耕論の課題」第25回九州縄文研究会福岡大会「九州縄文晩期の農耕問題を考える発表要旨・資料集」九州縄文研究会

市来町教育委員会 1991「川上(市来)貝塚」

市来町教育委員会 1993「川上(市来)貝塚2」

一瀬和夫1992「弥生船の復原」『弥生文化博物館研究報告』第1集 大阪府立弥生文化博物館

指宿市教育委員会 2016「橋幸礼川遺跡総括報告書」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(56)

大阪府立弥生文化博物館 2013「弥生人の船ーモンゴロイドの海洋世界ー」平成25年度夏期特別展

乙益重盛 1985「有刃打製石器小考」八幡一郎先生頌寿記念考古学論集編集委員会編「日本史の黎明」六興出版

鹿児島県教育委員会 2005「草野貝塚」『先史・古代の鹿児島資料編』鹿児島県教育委員会

鹿児島県教育委員会 2005「梓原貝塚」『先史・古代の鹿児島資料編』鹿児島県教育委員会

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011「南下遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020「木佐本原遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(203)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006「山ノ中遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(103)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011「芝原遺跡2縄文時代遺物編」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(158)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2020「出水貝塚」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(201)

鹿児島県歴史資料センター黎明館 1990「所藏品目録(Ⅷ)考古」

鹿児島県市教育委員会 1988「草野貝塚」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(9)

鹿児島県市教育委員会 2002「原田久保遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(35)

鹿児島大学総合研究博物館 2015「成川式土器ってなんだ?ー鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器」

上屋久町教育委員会 1981「一淡松山遺跡」上屋久町埋蔵文化財調査報告書(1)

川口雅之 2005「石製土掘具」東和幸編鹿児島県立埋蔵文化財センター2005「大坪遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(79)

川口雅之 2019「薩摩半島南部西海岸における弥生時代早期の編年」『鹿児島考古』第49号鹿児島県考古学会

川口雅之 黒木梨絵 立神倫史 2020「鹿児島県における縄文土器の実年代ー土器付着炭化物放射性炭素年代測定値からー」『縄文の森から』第12号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

喜入町教育委員会 1999「粘地遺跡(縄文編)」喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

木村昌也 2006「南九州における縄文時代後前半の土器研究一指宿式土器を中心に」『Archaeology From the South 鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集』

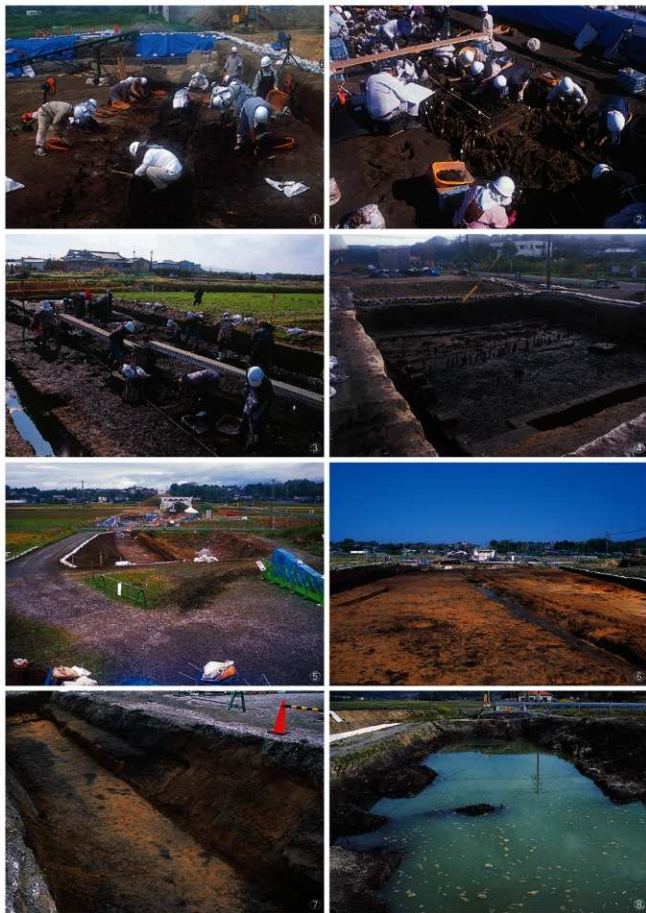
鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会

九州縄文研究会宮崎大会実行委員会事務局 2011「第21回九州縄文研究会宮崎大会 九州における縄文時代後前半の土器ー中津式・福田ⅡⅡ併行期を中心としてー」発表要旨・資料集 九州縄文研究会

久住猛雄 2018「九州島の古式土器の併行関係ー弥生時代終末期ー古墳時代中期初頭の九州島における広域編年ー」『集

- 落と古墳の動態Ⅰ－弥生時代終末期～古墳時代前期－追加資料 九州前方後円墳研究会鹿児島大会事務局
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1996「角江遺跡Ⅱ 遺物篇2(木製品)」
- 財団法人東広島市教育文化振興事業団2005「貴船1号遺跡発掘調査報告書」
- 寒川明枝 2002「祭祀行為についての検討－軽石製岩偶を素材として－」『人類史研究』13人類史研究会
- 寒川明枝 2005「第2節 終原貝塚出土の軽石加工品、貝製品、骨角器」『終原貝塚 重水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8) 重水市教育委員会』
- 柴田昌見 2013「古代瀬戸内海における海上活動に関する一試論」『みずは別冊 弥生研究の群像』大阪弥生文化の会
- 柴田昌見 2017「準構造船考」考古学研究会岡山6月例会資料
- 末吉町教育委員会1981「宮之迫遺跡」
- 鈴木道之助 1991「図録・石器入門辞典(縄文)」柏書房株式会社
- 田野町教育委員会 2004「本野原遺跡一」田野町文化財調査報告書(52)
- 田野町教育委員会 2005「本野原遺跡二」田野町文化財調査報告書(48)
- 重水市教育委員会 1999「終原貝塚 重水市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)」
- 重水市教育委員会 2005「終原貝塚 重水市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)」
- 千葉豊編 2010「西日本の縄文土器 後期 真陽社」
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿島大学法文学部考古学研究室
- 中村弘 2012「古墳時代準構造船の復元」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第5号 兵庫県立考古博物館
- 奈良国立文化財研究所 1993「水器集成図録」近畿原始篇「史料第36冊」奈良国立文化財研究所
- 深澤芳樹 2014「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覧」『国際常民文化研究叢書5』
- 福岡市教育委員会 1995「雀居遺跡2・3」
- 藤尾慎一郎 1993「南九州の突帯土器」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会
- 藤尾慎一郎 坂本稔 東和幸 2013「志布志市稲荷遺跡出土弥生前期突帯土器の年代学的調査－大隅半島の弥生前期の実年代－」『縄文の森から』第6号 鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報
- 本田道輝 1997「第二項 田中堀遺跡調査の概要」『川辺町郷土誌 追録』川辺町郷土誌編集委員会
- 水ノ江和同 1993「九州の緑帯文土器－九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題－」『古文化談義 第30集(上)』九州古文化研究会
- 宮崎市教育委員会 2006「本野原遺跡三」
- 三輪晃三 1996「九州阿高式系・緑帯文系土器群の研究－縄文中・後期の土器ホライズンの形成とその背景－」『奈良大学大学院 研究年報 創刊号』奈良大学大学院
- 山崎真治 2003「緑帯文土器の編年的研究」『東京大学考古学研究室研究紀要 18巻』東京大学考古学研究室
- 横田洋三 2004「準構造船ノート」『紀要』第17号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 横田洋三 2014「組み合せ式船体の船」『紀要』第27号公益財団法人滋賀県文化財保護協会

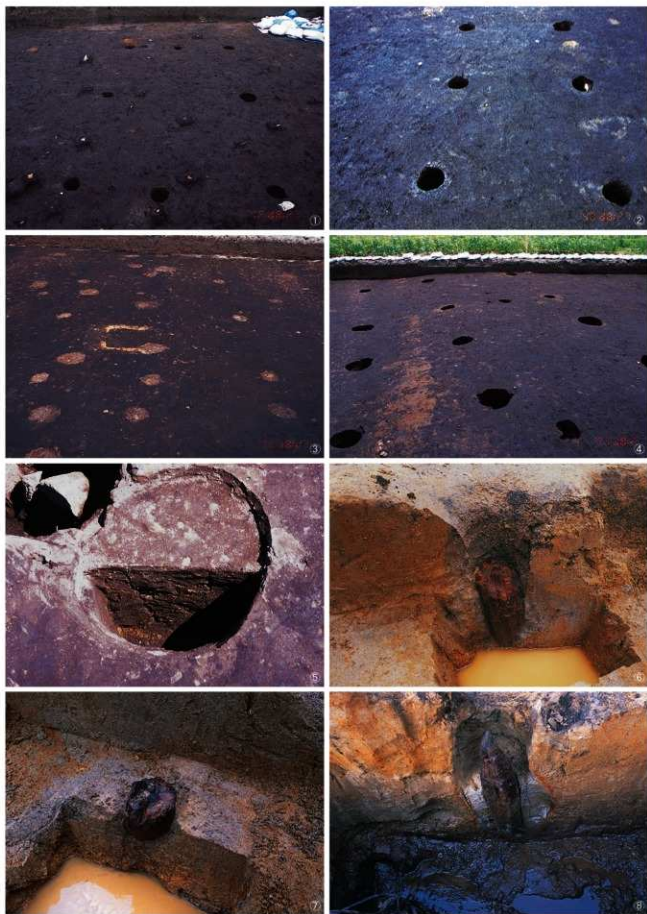
圖 版



① ② ③ 作業風景 ④ 杭列調査中 ⑤ ⑥ ⑦ 調査終了 ⑧ 水没した調査区



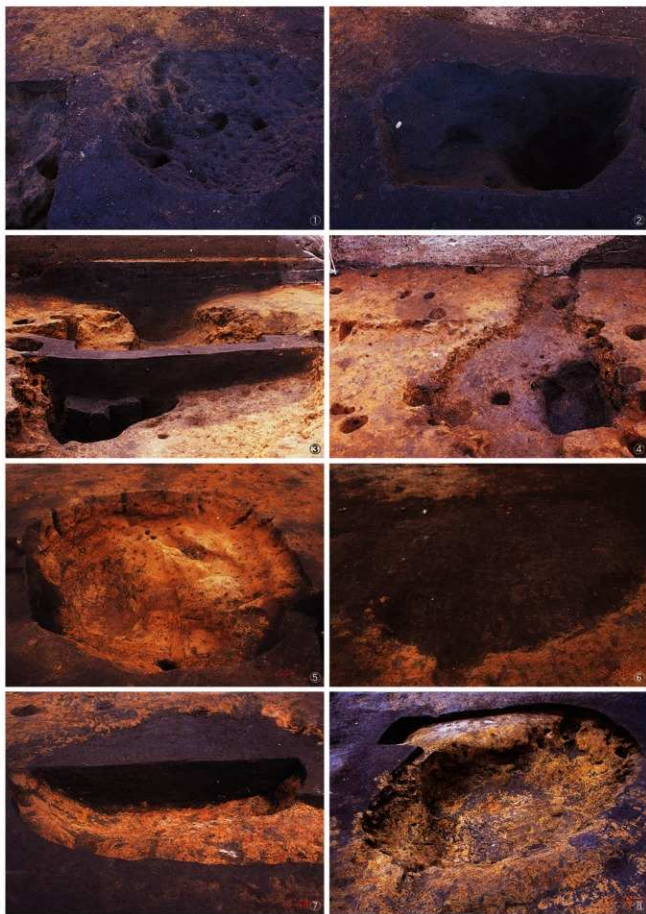
① E·F-7区北壁 ② F-10区西壁 ③ E-13·14区 D-14·15区東壁 ④ E-16~21区西壁
⑤ B·C-18·19区東西断面 ⑥ E-19~21区西壁 ⑦ D-29区西壁



① 掘立柱建物跡 2号完掘 ② 掘立柱建物跡 5号完掘 ③ 掘立柱建物跡 3号検出 ④ 掘立柱建物跡 3号完掘
 ⑤ 柱穴 2半截 ⑥ 柱穴 3半截 ⑦ 柱穴 4半截 ⑧ 柱穴 5半截



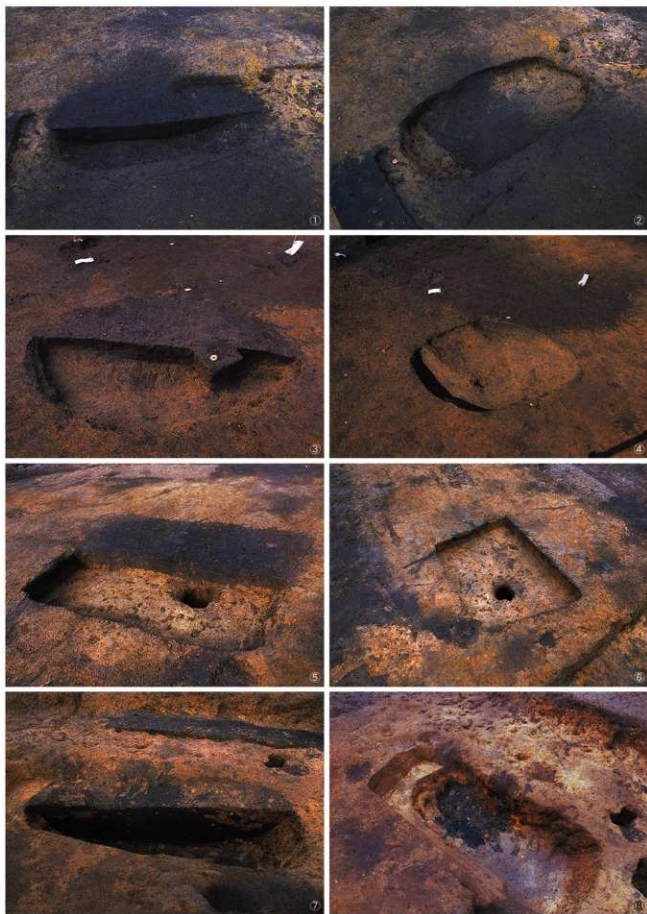
① ビット検出 ② C-29区ビット完掘 ③ D-28区ビット完掘 ④ 伊跡1号検出
⑤ 伊跡1号半截 ⑥ 伊跡1号完掘 ⑦ 伊跡2号検出 ⑧ 伊跡2号半截



① 土坑 1号完掘 ② 土坑 2号完掘 ③ 土坑 3号半截 ④ 土坑 3号完掘
 ⑤ 土坑 4号完掘 ⑥ 土坑 5号検出 ⑦ 土坑 5号半截 ⑧ 土坑 5号完掘



① 土坑6号断面 ② 土坑6号完掘 ③ 土坑7号半截 ④ 土坑7号完掘
⑤ 土坑8号遺物出土状況 ⑥ 土坑8号完掘 ⑦ 土坑9号検出 ⑧ 土坑9号断面



① 土坑10号半截 ② 土坑10号完掘 ③ 土坑11号半截 ④ 土坑11号完掘
⑤ 土坑12号半截 ⑥ 土坑12号完掘 ⑦ 土坑13号半截 ⑧ 土坑13号完掘



① 溝状遺構 1号断面 ② 溝状遺構 1号完掘 ③ 溝状遺構 2号断面 ④ 溝状遺構 2号完掘
⑤ 溝状遺構 3号完掘 ⑥ 溝状遺構 4号検出 ⑦ 溝状遺構 4号断面



① 溝状遺構5号完掘 ② 溝状遺構6号検出 ③ 溝状遺構7号検出
④ 溝状遺構7号完掘 ⑤ 溝状遺構8号検出 ⑥ 溝状遺構8号完掘



① 溝状遺構9号完掘 ② 溝状遺構10号完掘 ③ 溝状遺構11号検出 ④ 溝状遺構11号完掘
⑤ 溝状遺構12・13号検出 ⑥ 溝状遺構13号断面 ⑦ 溝状遺構14号検出 ⑧ 溝状遺構14号断面